岡崎久彦文語賞二等賞

誇りかなる夏の日

由利原（ゆりはら）直子

奈良はいにしへの都なり。數多の鹿ぞ遊びける。神鹿と遇されて、春日の神にも人にも鍾愛せらるること限りなし。さて采女の艶なる嘆きのいまにやまぬは猿澤の池なり。池のほとりなる叡智超脱の五十二段を登れば、興福寺聳ゆ。南圓堂北圓堂、五重塔など堂宇にぎはひ、麗しき時をぞ刻みける。

腕に覺えありとて我から頼む牡鹿、ここ興福寺に集ふ。おのおの武を誇る強きのなかに、いとどちゃうじたる牡鹿、二あり。一つはこの地の王たらむとふ心を抱く黑毛の大きなる鹿。顔よきはさらなり、かかり幽玄にして器量すぐれたり。黑き龍の地に降りてそぞろ歩くやうなり。人、優なる鹿ぞ來たりたるよと彼を愛づ。「美し。グレイト。」の聲、紛々たる雪となりて彼を覆ふ。我、彼を「剛毅」と名つく。

いま一つは少し小さけれども鬪謳に尾を見すること、たんだ一度もなかりけり。いにしへ刃の驗者、鹿に化し給へるかと疑はる。猛なれば、額に利劍植ゑたる狼のごとし。されど彼かしこき目して常に詩魂ををどらするがごとく見ゆるがゆゑに、我、彼を「詩人」とそ呼びける。詩のありやう、おほかた象徵派ならむ。鹿は萬物照應の論を人よりつまびらかに知る者なり。

詩人、冬の角合はせの爭ひにことごとく剛毅を打ち負かしつ。剛毅、體まされども挑まるれば肝魂も消え消えとなる風情なり。他の鹿には遲れを取らざる剛毅、憂へ逸ること限りなし。剛毅は鹿の正道を得たり。強き者が王たらむこそ、鹿のあるべき姿なれ。しかして詩人、王位を望まず。己れより強きのあるをひたぶるに厭ふのみにて、自由狼籍世界に遊ぶなり。

夏來たりて鹿の角、あざやかに天を指しぬ。二つの鹿、寶冠のごとき角をぞ載せたりける。

やはらかき角大切なれば、この季の鹿は爭ひに挑むに、立ちて手を打ち合はす。人の好くなるボクシングにいささかも異ならず。

剛毅、手の長きによりて甚だしき利あり。夕べにこの二頭、草食みに面面出でたりけるが、逢ひに逢ひたりとてたちまちに互ひに睨め、づんど立つ。勢ひに怖ぢて邊りの鹿、人、ちりぢりに逃げ去りぬ。我も逃げむとせしが、剛毅許さざりけり。勝負、目にも寄って見よてふ心、彼の面上に浴れたり。

詩人、あはれなりけり。剛毅の氷のごとくなる鹿の爪、霰のたばしる體にてもみ押しに押しけり。一合だに得打たで、明日は七月の堅き土に打ち伏せられてぞ奔りける。

我案じて詩人の方にいささか寄らむとするに、剛毅、身をばつと横さまに爲して堰きき。「我勝ちぬ。しかれば君、我を專らにうるはしみせよ。」とそ。剛毅の云ふは正論なり。鹿には鹿の理侍り。勝ちたる牡鹿こそ牝鹿に愛敬さるるなれ。奈良の鹿、神鹿とうたはれて千年の問に人をして自然の部分と識れば、牡鹿の女人へのもてなし、牝鹿をあしらひぬる様にやや通ひ侍り。

我とどまりぬ。剛毅喜びてこまやかに草を食む。なほ危ふがりて、我を長き胴にて卷きて居り。剛毅、いにしへの動物磁氣理論を思はする精氣に滿てり。黑き背に眞白き鹿の子のあらはるるは、夜の大空に星の輝くさまにさも似たり。「君、妙なり。天に住まひするならむ。よき繪師の君を知らば、必ず繪に寫さむ。君、若沖の作から拔け出でたるやうなり。別きて君のまことしくて直ぐなる性、さきはふ生こそ結ぶめれ。」と我云ひ、心を盡くして彼を撫づ。剛毅、潤びたる目して我を見上ぐ。甘えて身を揉み、しきりに我に擦りつくる。

さて剛毅、晴るかして一時を遊びて過ごしけるが、しばらくして鹿群れに歸る刻ぞとて、暇ごひして去りにけり。

詩人、去ることも來ることも得で、影法師にて立ち忍ぶ。我赴けば、彼、夏草の香の高きをもてあそびつつ、はかなき笑みして寄り來る。「君、いまだ心のありて候ふか。」と問ふ顏なり。我懇ろに彼を撫づ。

この時、獨逸の收穫祭、夏の奈良にて興業す。やにはに「プロオスト！プロオスト！」の叫喚起こりて賑々しき樂を奏でぬ。詩人驚きて宴を覆ふ天幕を凝然と見込みぬ。我、祭りの意を詩人に說けり。時も時なりとて、歐州にも鹿信仰のあるを語れり。

「ひとびと群集して、麥酒を飲みて祝ひあふ。麥酒、人には良藥なれども鹿には魔緣のものなり。さて獨逸國は西國なり。萬里の波濤の果てにてぞある。現にも深祕世界にもありなむ君とは違ひてまぼろしの鹿なれども、西國にも神鹿のゆゆしく侍るなり。雙の角の問に黃金の十字架、生ひたる。いとどしき靈驗に立ちあひて候ふ。聞くならく、テンプル騎士團亡じにし時、十字架の鹿あらはれて佛蘭西王の命をぞ告げたりけるとかや。同じ頃、日本にては春日權現記、成る。ご神鹿、數知れず繪に姿をとどめて候ふ。」

詩人、澄みたる聲を我の物語の隙ひまに挾みて聞き入りたりつるが、つと步みてやにはに鹿にとりては丈六なる柵を一つ蹴倒しぬ。柵は祝ひの後ろを護れり。詩人、親しき笑みにて我を顧みしてあふぎぬ。「なう、めでたき宴、ともに行かばや。我、君を具せまほし。」とふ笑みなりけり。あるいは西國の神鹿に見參せばやと思ひけむ。

「あなや詩人、裏に挑むは敵ふまじ。いで、來(こ)。正面にて見ばや。」我、詩人を招く。彼怪しびてゐたるが、やがてゆらりささと廻りて饗の面に赴きぬ。

酒宴に打ち興ずる人びと、深沓をまねびたる大杯をしきりに揭げて醉ひ騷ぐ。チロルの祭りの裝束して濃き綠の半洋袴に眞鍮の胸飾りをはつかなる鈍色に光らせたる獨逸の樂人、ホルンを奏して練り彷僅ふ。舞臺にては遊樂遊舞をなす。昔の野に待ち居てゆゆしき酒を行人に勸めし亡靈も驚きて樽をかたげ、松蟲の音を慕ひて空しくなりし友も土中より起き出でつるらむ境界なり。

火灯る。ほの暗き松の梢になまめかしき風の渡る下、酒宴は夢幻のごとくなる幸ひの面影を湛へけり。詩人、ひたぶるに祭りを見る。彼の號珀のやうなる目に灯火の映りて、眞實なる黃金になりぬ。「君、凛として美し。いかなる詩興の出できたるらむ。」と我云へば、詩人、面を輝かす。一頭の鹿にて數百の人に對ひたるさま、鹿てふものにあるまじき勇な

るべし。竝ぶ鹿のいつくにかある。

日暮れぬ。鹿は山野に歸り登るべかりけれども、詩人我を離るる氣色なし。「おことの閨はいつこぞ。」と問ふに、一切の要を得ず。

あたかも若牡鹿の一群れ、詩人に來逢ふ。宴の鳴動に怖ぢ、いたはりあひて急ぎ歩くこそいとほしけれ。「日頃は傍にも寄られぬ詩人が、今日はやさしうなつたるそや。」とて鹿ども詩人を圍みてらうたき尾を立て、をどりて喜びあへり。この若鹿ども、みな詩人を貴びて目つかひ口つき、尾の振りやうを寫すことたびたびに及びぬ。詩人、若鹿を愛して長き鼻をめいめいに合はせけるが、やがて入り日も立ち返りなむずるご機嫌にて、いとど華やぎて浮き立ちにけり。

後に剛毅と詩人、二頭政治を敷きけり。